

「試す」と「評価」

やまざき
山崎

しゅんいち
俊一

●日本教職員組合 書記次長

学校では、学びの定着を確かめるべく、子どもにテスト（中・高では（定期）考査とも呼ばれる）を受けさせることが通例だ。テストが好きという子はあまりいないし、むしろこのせいで学びから離れていく子どもも少なくない。なぜテストがあるのか。テスト（考査）の意味を調べてみた。

テスト	①試験。検査。特に、学力試験。 ②一般に、考えたことや試作品などを実際に試してみること。
考査	①考えしらべること。 ②学校（主に中学校・高等学校）で生徒の平素の学業成績をしらべること。試験。テスト。

両者に共通する「試験」も調べてみた。

試験	①ある事物の性質・能力などをこころみためすこと。 ②問題や課題を出して回答・実行させ、学習・訓練の成果・習得度や及第・合格・採否を評価・判定すること。 (いずれも広辞苑第六版より)
----	--

テスト（考査・試験）には意味が2通りあるようだ。一つは「試す」、研究や開発の場でさらなる発展に向け中間考察的に行うもの。もう一つは「評価」、問題を回答させその結果を評価する、いわゆる学校で行っているもの。子どもがテストを好まない理由はまさに「評価」にある。まざまざと点数（結果）を突きつけられ、優劣・順位をつけられ、不合格（未習得）には追試や課題・補習などペナルティ（本来は罰ではないのだが）まで与えられるのだから当たり前だ。さらに、テスト界の最たる関門「受験」が存在する以上、容易にテストから逃れる道を選べないことも、子どもを苦しめる要因である。

私たちは、一般社会でも常に「評価」され続けている。「プレゼンがんばったな」「そんなんじゃない人事に響くぞ」など仕事の場面だけでなく「人の話聞いてないよね」「おしゃれになったね」といった日常的なものまで、善悪問わず「評価」され、逆に自分も無意識に「評価」しまくっている。

「評価」にまみれた社会から逃れられないのなら、せめて子どものうちは「評価」の必要ない場面を少しでも増やしてあげたい。学びの場面こそ、それが可能だと私は考える。テストを「評価」から「試す」に変えれば、たとえ結果が振るわなくても次にどんなことをすれば良いか前向きに考えられるし、そもそもどこまでできるようになったかどんどん試してみたいくなるものだ。またその結果は、授業者に対しても授業改善への「試す」の要素となる。

「試す」テストにすれば、その結果も受けた本人と授業者が知れば十分であり、無用な「評価」も競争も起こらない。

今年も「全国学力・学習状況調査」が悉皆で行われ、点数結果が公表された。毎年過度な競争が懸念されているものの、報道等は相変わらず全国順位に終始している。そもそも必要ないテストだが、その目的から見ても結果は受けさせた側（文科省・自治体・学校）と受けさせられた子ども本人が知っておけば十分だ。

25年度文科省予算では、このテストに約35億円が計上されている。どうせなら「評価」ではなく、子どもの意欲につながる「試す」に使ってほしい。